

国宝

菊・流水・蝶の装飾が付いた籠手

この籠手は 13 世紀に制作された。中世（1185 年～1568 年）から現存する唯一の完全なセットとして、国宝に指定されている。

この甲冑部品の大きな特徴は、複雑な金鍍金の装飾にある。手甲の上部には、菊と水の流れを背景に蝶が羽を広げている彫刻が施されている。この吉祥文様は長寿を象徴している。

蝶の羽の小さな部分には、鳥、鳶の蔓、榎の葉など、それぞれ異なるモチーフが施されている。

籠手の最古事例は、古墳時代（約 250 年～700 年代後半）の埴輪に見られる。これらの初期の例は前腕を覆うだけであった。9 世紀になって騎射が戦場を席卷するようになると武士達は、弓を引いて射るのに邪魔にならないよう右腕はそのままに、左腕だけに袖のついた防具をつけるようになった。両腕に長袖の籠手を着用するようになったのは、刀剣を使った接近戦が一般的になった 1300 年代半ばである。1200 年代に作られたこの揃いの籠手は、特に初期の例である。